

# #保阪正康さん講演 #歴史どう引き継ぐ 学び、疑い、自ら考える

福元久幸 小坂真希 伴野昭人

2025年5月21日 4:01



## 戦争と平和 [フォロー](#)

- [#夢さぼプラス](#)
- [#戦争と平和](#)
- [#大学](#)
- [#子育て | 教育](#)
- [#経済](#)

「歴史をどう引き継ぐか〜戦後80年と昭和100年の視点」と題し、ノンフィクション作家の保阪正康さん（85）が行った講演会。江戸時代から、富国強兵の明治時代、さらに無謀な戦争へと突き進んだ終戦までの歴史を見渡しながら、昭和初期の軍事指導者らに対する怒りなどを静かに語った。4月29日に札幌市北区の北大学術交流会館で開かれた講演の内容をどう受け止めたのか。北大生の声を集めた。



北大学術交流会館で開かれた保阪正康さんの講演会（岩崎勝撮影）

## ■特攻隊員の声に驚き

講演会は、北大大学院メディア・コミュニケーション研究院の城山英巳研究室が主催した。城山教授は「保阪さんは戦争を体験した人たちへの膨大なインタビューを行い、『記憶』を『記録』にする仕事をしてきた」と、講演会冒頭で紹介。さらに参加者に向けて「歴史をどうやって若い世代に引き継いでいくのかを真剣に考えなければいけない」と訴えた。

2時間にわたった講演後、理学部数学科の河野葵太（そうた）さん（19）は「戦時中、暴走する軍事指導者たちが天皇にでたらめな情報を伝え、だまされていたという指摘は意外だった」と話した。さらに「特攻隊員の言葉を書き取った手帳に、赤裸々な不満があふれていた話を聞き衝撃を受けた」という。

大学院国際広報メディア・観光学院の堀田さやかさん（23）も、特攻隊員の話が特に気になった一人。「学問を積み、当時の社会に疑問を感じながらも、戦争という事実から逃れられなかったという話が印象に残った」と受け止めていた。

中学校での教育実習で歴史を担当した経験から「戦争というと『別の世界の話』と受け止められがちで、生活者の視点にあまり踏み込むことができなかった」と振り返ったのは、大学院教育学院の岡田陶子さん（23）。「今回の講演会は自分がどうやって教えるのかという点でとても参考になった」と語った。

講演2日後の5月1日には、城山教授の一般教育演習で1年生17人が講演を振り返った。初めに城山教授は「80年前の終戦時に戦争を直接体験し、記憶している人はすでに90歳前後になっていて、10年後の『戦後90年』に戦争を知っている人はほとんどいなくなってしまう。少しでも戦争が何であるかを知り、考えてほしい」と呼びかけた。

続いて学生たちは三つのグループに分かれて、講演内容に対する感想や意見を語り合った。各グループを代表して、文学部の二井（ふたい）真理さん（18）は「授業で世界史を勉強した時、国によって視点が違うので歴史を語るのは難しいと思っていた」と受け止める。それでも今回の授業で議論したことで「解決策は何か、という切り口で考えることができた」と振り返る。



講演内容についてグループで感想や意見を述べ合う北大生（岩崎勝撮影）

## ■意見出し合う大切さ

経済学部の門間（もんま）葵さん（18）は「戦争に関するニュースを見て普段モヤモヤしていたことを話す機会になった」と、意見を出し合う機会の重要性を感じていた。

同学部の吉田勝哉さん（18）は、戦争の悲惨さなどを語り継ぐ工夫として「教科書などで原爆関連の資料写真を見るより、被爆地のVR（仮想現実）を小中高校に導入すれば実体験に近い感覚を経験できるのでは」と提案。さらに「教科書だけじゃなく、資料館などを見学して歴史の知識を付けることが大事だと思う」と話していた。

このほか、「SNS上のフェイクをなくすことはできないが、情報をどう選ぶのかは自分たちのモラルだと思う」「戦時下での1人1人の個人の話を知りたい」といった意見も出た。

城山教授は授業中も「あらゆる書籍や記録を読んで勉強し、疑問を持ち、自分の考えを持ってほしい」と、自分で考えることの重要性を繰り返し語りかけた。今回の講演会と授業を機に、さまざまな学部、大学院の学生たちが昭和100年と戦後80年という歴史に関する知見を深め、戦争と平和を自分事として考える意識を高めた。

## ■保阪正康さん講演（要旨）



江戸時代からの歴史を検証しながら講演する保阪正康さん（岩崎勝撮影）

今日は歴史をいかに引き継ぐかがテーマです。父母、祖父母らが生きた時代は、さまざまな制約がありました。そうした中で彼らがどう生き、私たちに何を教えているのか。そこを軸に今日はお話したい。

江戸時代の約260年間、日本は1回も対外戦争を行いませんでした。私は昭和史を検証する作業を続けてきましたが、江戸時代までさかのぼらないと日本人の本質は分からないと途中で気がつきました。この間、武士は武術を武道に変えて、人格陶冶（とうや）や学問に励み、各藩は戦争に備えて情報収集・分析を怠りませんでした。

「戦後80年」よりさらに長きにわたって戦争がなかったのは、そこに智慧や歴史的遺産があったはずだからです。日本は明治以降、プロイセンの軍事をまねる形で近代国家として出発しましたが、欧米の軍事学を生半可な知識で導入しました。なぜ軍隊を持つのか、軍隊は何のために存在するかという部分は自国の江戸時代の歴史から学べたのにそうしませんでした。

次に軍事指導者の思想や姿勢、体制作りを、国民が問題があると思っていた例について考えたい。戦没学徒総勢75人の手記をまとめた書籍「きけわだつみのこえ」には、大半が出陣学徒だった特攻隊員の文書もあります。この中に信州安曇野（現・長野県池田町）出身で慶応大生だった上原良司の遺書があります。上原はファシズム国家が滅びるのは当然としながらも、自分は時代の枠組みの中で死を受け入れると記し、所感には「明日は自由主義者が一人この世から去ってゆきます」と書いています。

その時代に私たちも生まれていたかもしれず、上原は私たちの代わりと言えます。だから特攻隊員を批判する気にはなれませんが、戦時指導者に対しては容赦できない。特攻作戦は学徒の知性や能力を意図的に用いており、理不尽さを感じます。責任を追及すべきであり、私が出陣学徒について今もなお調べているのはその怒りからです。

「天皇に戦争責任はあると思うか」との質問を受けます。開戦詔書を発して署名した人に責任がないわけではありません。ただ戦争責任といった時の天皇の見方が余りにも雑ぱくだと感ずることがあります。

法的責任、道徳的責任、歴史的責任などと整理し、見ていくことが大切です。開戦責任といっても、決定した責任か、追認した責任かなど、私は表を作って一つずつ検討する作業を行いました。

一方で政治指導者や軍事指導者が天皇の名の下でどんなことをしたか、実態も知るべきです。具体的に調べると、天皇の責任と言うには、おこがましい事実がいくつも出てきます。

例えば、天皇が海軍に日米の戦力比の資料を求めた時、内部で「いつものようにメイキングしますか」との会話があったことが記録されています。これは海軍が意図的に数字を作り替えて報告してきたことを意味します。陸軍でも人事案件の報告で天皇をだましていたことがうかがわれます。天皇制国家といっても軍事指導者がデタラメな戦果を報告し、天皇に戦争責任を押しつけていたら…。資料からそうした面をきちんと読み解き、戦争責任について議論することが大切だと強調したい。



<略歴>ほさか・まさやす 札幌市生まれ。出版社勤務を経て、ノンフィクション作家として昭和史に関する多数の著作があり、2004年に菊池寛賞、18年に和辻哲郎文化賞、北海道新聞文化賞を受賞。著書に「昭和陸軍の研究」「昭和天皇実録 その表と裏」「ナショナリズムの昭和」など。

<取材後記>学生たちが講演後の授業で「戦争について、全体のまとめより個人からみた話を知りたい」と話していたのが印象的だった。新聞の役割の一つには、日常の視点から記録していくことがあると思う。「国は」「政治は」「教育は」などの大きな主語で始めると、必ずこぼれ落ちる視点がある。事実を踏まえた上で、大きな主語では見えてこない話を記録することの重要性を改めて感じた。(小)